

ティリンスにおける後期青銅器時代IIIC期から 原幾何学文様期にかけての埋葬資料

高橋 裕子

Graves at Tiryns in Argolid, Greece, from the Late Helladic IIIC to the Protogeometric Periods

TAKAHASHI Yuko

The objective of this paper is twofold. First, it aims to create a database of the known and published graves at Tiryns in the Argolid, Greece, dating from the Late Helladic IIIC to the Protogeometric periods. Second, it conducts an analysis of the cemeteries, graves, and grave goods, identifying their main characteristics.

はじめに

ミケーネ時代の大遺跡として著名なティリンスにおいては長年にわたって発掘をはじめとする多様な調査や研究が続けられており、現在でもなお新しい資料や知見が陸続と発表されている¹。例えば輸送用の鍔壺に関する研究などがその一例であるが²、何よりも顕著な成果が得られているのは後期青銅器時代IIIC期に関するものであろう³。当該期の種々の資料が城塞内外から発見されたことにより、ミケーネ文化が崩壊した後においてもティリンスはある程度の規模を有する集落として存続し続けていたことが明らかとなった。さらにこの時期に関しては謎めいた「ティリンスの宝物」⁴や対外関係を示唆する遺物⁵も出土しており、研究者の注目を集めている。

後期青銅器時代IIIC期以降のティリンスにおける資料傾向を概観すると、次の亜ミケーネ期には遺構や遺物が減少するが、その後の原幾何学文様期に入ると再び発展の兆候を示すようになる。原幾何学文様期のみならず幾何学文様期の資料も相当数確認されており、初期鉄器時代のティリンスはアルゴリス平野の中で大規模な部類に属する集落であったことが明らかとなっている。アルゴ

リスにおいてはミケーネ時代と初期鉄器時代とでは集落の勢力関係に大きな変化が生じており、ミケーネ時代の大集落が初期鉄器時代には弱体化した例も見受けられるが、ティリンスは双方の時期に繁栄を謳歌した稀有な存在であった。

かかるティリンスに関して筆者はかねてより資料の分析や検討を積み重ねてきたが、その一環として、本稿においては後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料に焦点を当てることにしたい。墓および副葬品は上記の対象時期に関して通時的に検討することが可能な重要資料であり、本稿の試みはティリンスのみならずアルゴリス全体におけるミケーネ文化崩壊期から初期鉄器時代にかけての社会変動を探究する上で有益な基礎的作業となるであろう。

資料の紹介

ティリンスにおける後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料を、以下、場所ごとに記載していく。

(1) 下部城塞の遺骨

ティリンスからは城塞内部（下部城塞）から多数の遺骨が発見されており、時期に関しては不明のものも多い。ただし後期青銅器時代IIIB期やIIIC期のものが含まれていることが判明している。これらの資料に関しては既に別稿にて記したので、ここでは省略する⁶。

(2) アクロポリス周辺の墓

ティリンスのアクロポリス周辺一帯からは本稿の対象時期の墓が相当数発掘されている（図1）。しかし詳細なデータは未発表のものが多く、全体像を詳らかにすることは困難である。公開されている情報に関しては後掲の一覧にまとめがあるので、ここではそれを基に若干のことを記していく。

この一帯からは後期青銅器時代IIIC期、亜ミケーネ期、原幾何学文様期のいずれの墓も確認されているが、後期青銅器時代IIIC期の事例はIIIC期と亜ミケーネ期とに意見が分かれている1971/2号墓のみである。ということは、現今の公表資料に鑑みるならばアクロポリス周辺が埋葬場所として選択されるようになったのは後期青銅器時代IIIC期の遅い時期からであり、本格的な使用は亜ミケーネ期に入ってからと言えるであろう。

亜ミケーネ期の墓数に関しては筆者の一覧では5基前後であるが、パパディ

ミトウリウが発表している分布図においては箱形石棺墓6基および土壙墓2基が示されている⁷。続く原幾何学文様期になると墓の数は急増し、筆者が確認しえたものだけでも35基前後に上る。パパディミトウリウの分布図ではさらに数が多く、箱形石棺墓が34基、土壙墓が6基、ピソスなど土器を棺とした墓が3基、すなわち合計で43基が点在しており、さらにこの分布図が作成された後も新しく資料が発見されている。

亜ミケーネ期と比べると原幾何学文様期の墓数は急激な増加を示しており、注目に値しよう。それらの墓はアクロポリス周辺各地から発見されているが、ただしまとまって出土している場所もあり、原幾何学文様期においては複数の墓域が形成されていたと判断される。

墓の形態に関してはいずれの時期のものも箱形石棺墓や土壙墓などすべて単葬のものであり、また埋葬方法は土葬である。

副葬品に関しては土器と金属製品の二種類に大別されるが、農業刑務所の墓域の原幾何学文様期の墓においては土器よりも金属製品の方が多いという特徴が見受けられる（VI、VII、XV、XVIII号墓においては土器が副葬されており、金属製品のみである）。

（3）プロフィティス・イリアス

城塞から東方にあるプロフィティス・イリアスの東斜面において50基前後の横穴墓（岩室墓）群が発見されている⁸。その内15基が発掘されておりその成果によると、ここは後期青銅器時代IIA期から使用されていた長い歴史を有する墓地であり、中には後期青銅器時代IIIC期や亜ミケーネ期の資料が確認されたものも存在する。埋葬方法はすべて土葬である⁹。

後期青銅器時代IIIC期に使用された墓はV、VI、VII、VIII、XV号墓で、さらにXVI号墓もおそらく含まれよう。一方亜ミケーネ期に関してはVとVI号墓の2基である¹⁰。ただし調査された墓は全体の三分の一に満たないため、実際にはより多くの墓がそれぞれの時期に使用されていた可能性は否定できない。原幾何学文様期以降の資料は発見されていないため、現今の資料状況においては亜ミケーネ期を最後にこの墓地は使用されなくなったと結論される。

なおプロフィティス・イリアスの西側斜面からは、トロス墓も2基発見されている¹¹。

埋葬資料の検討

上記の資料状況を踏まえた上で、後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料に関して特徴および傾向などを記していきたい。

1) 墓および埋葬の数

未発表資料や発掘されていない墓が存在するため、いずれの時期に関しても正確な数字を示すことは不可能である。ただし埋葬数の増減について大まかな傾向を記すならば、後期青銅器時代IIIC期に比して次の亜ミケーネ期には減少する、そして原幾何学文様期に入ると急増することが指摘されよう。

2) 墓地および墓域の場所

後期青銅器時代IIIC期においてはプロフィティス・イリアスの墓地が使用されていたほかに、下部城塞においても埋葬が行われていた。プロフィティス・イリアスはミケーネ時代から続く埋葬施設であり、ミケーネ文化崩壊後のIIIC期においてこの墓地を使用した人々は、ミケーネ時代以来の墓所を継承したグループと推測されよう。すなわちティリンスの後期青銅器時代IIIC期においては、プロフィティス・イリアスの墓地を継承した人々と、そうではなく下部城塞に埋葬された人々と、二つの集団に区分されていたことが推測される。プロフィティス・イリアスの墓地からは続く亜ミケーネ期の資料も出土しているが、原幾何学文様期の埋葬は確認されていないことから、この埋葬場所は亜ミケーネ期を最後に放棄されたと判断される。

一方で後期青銅器時代IIIC期の終わりごろからアクロポリス周辺において埋葬が行われるようになる。亜ミケーネ期を経て原幾何学文様期になると多数の墓がこの一帯に作られるようになった。

3) 墓の形態

後期青銅器時代IIIC期においては、プロフィティス・イリアスの墓地では横穴墓が使用されていた。ただし新しく作られたものではなく、以前から存在した墓を利用している。一方で下部城塞におけるこの時期の埋葬は土壙墓か、もしくははっきりとした墓壙さえ不明なものもある。

亜ミケーネ期においてはプロフィティス・イリアスの横穴墓とアクロポリス周辺一帯の単葬墓の二種類が存在した。次の原幾何学文様期になると、横穴墓はもはや使用されなくなり、単葬墓のみとなる。原幾何学文様期における単葬

墓の種類は箱形石棺墓が圧倒的に主流である。

4) 埋葬方法

後期青銅器時代IIIC期、亜ミケーネ期、原幾何学文様期のいずれにおいても例外なく土葬である。また単葬墓の場合、埋葬姿勢は屈葬が一般的である。

5) 副葬品

いずれの時代も土器と金属製品の二種類が主要な副葬品である。金属製品に関しては原幾何学文様期になると鉄製品の登場という大きな変化が生じる。腐食する鉄という材料は本来装飾品には適していないが、鉄製指輪などアクセサリが制作されたことは特筆に値しよう。鉄はおそらく最先端技術の高価な素材であったと同時に、威信財としての役割を果たしていた可能性が推察される。

さらに注目したいのが、1974/11号墓から出土した象牙製小球が付いた鉄製ピンである¹²。象牙が高価な素材であったことは想像に難くないが、それが鉄と組み合わせられているということは、鉄がいかに貴重なものと見なされていたかを物語っている。

6) その他

1972/3号墓のそばから牛2頭と犬2匹の骨が発見されたことは、葬送儀礼という観点においても重要な資料であろう。

おわりに

ティリンスの集落はミケーネ文化崩壊後の後期青銅器時代IIIC期もある程度の規模を有しており、初期鉄器時代にかけて断絶を経験することなく営まれていた。亜ミケーネ期においては集落規模が縮小した可能性が高いが、墓数から推測する限り原幾何学文様期以降再び勢力を回復していった。

このように途切れることなく居住されていたことが確認される一方で、埋葬資料からはこの期間に大きな変化を経験していたことが看取される。ミケーネ時代以来のプロフィティス・イリアスの墓地を継承した人々のグループが、亜ミケーネ期を最後に消滅したことはそれを端的に示唆していよう。その後の原幾何学文様期以降、ティリンスの集落は新しい歩みを踏み出していったと推察される。

このようなティリンス内部における変化が、アルゴリス平野全体の社会変動

とも密接に結びついていたことに、疑念の余地はない。今後は本稿で対象とした時期におけるアルゴリス全体の趨勢を、より総合的に論及していきたい。

-
- 1 比較的最近の発掘報告として、Maran, Papadimitriou *et al.* 2015, Maran & Papadimitriou 2017, Maran *et al.* 2019, Maran & Papadimitriou 2021. さらに、cf. Maran 2016.
 - 2 Kardamaki *et al.* 2016, Day *et al.* 2020 (筆者未見). Cf. Pratt 2016, 51. 邦語の関連文献として、拙稿「青銅器時代終末期におけるティリンス—建造物T、「ティリンスの宝物」、クレタ製粗製鍍壺に関する資料紹介」『西洋史研究』新輯第43号、2014年（以下、拙稿2014年）、146-147頁。
 - 3 例えば、Stockhammer 2011, Maran 2012, Mühlenbruch 2015, Vettters 2015, Brysbaert & Vettters 2015, Maran 2016. さらにティリンスに関する論考でこの時期にも言及があるものとして、cf. Stockhammer 2009, Vettters 2011, Maran 2018. 邦語の関連文献としては、拙稿2014年。
 - 4 拙稿2014年、144-146頁。さらに、cf. Maran 2012, 121-126, Konstantinidi-Syvridi 2016. ただし、「ティリンスの宝物」の年代に関しては議論がある。
 - 5 拙稿「ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての対外関係」『西洋史研究』新輯第49号、2020年、72-77頁。鍍の部分品に関してはさらに、cf. Maran 2018, 228-229. 他に、Maran & Stockhammer 2020 (筆者未見).
 - 6 拙稿2014年、140-141頁。
 - 7 Papadimitriou 1998, 118-119, fig.1 α , fig.1 β , Papadimitriou 2003, 715, fig.1.
 - 8 アクロポリスからの距離に関しては発掘報告では1.5km前後東方と記されているが (*Tiryys* VI, 23)、城塞から800mと記す文献もある (Mountjoy 1999, 66)。アクロポリスのどこを起点として計測するかによっても違いが生じると思われる。
 - 9 *Tiryys* VI, 23-126, Mountjoy 1999, 66.
 - 10 *Tiryys* VI, 23-126. Cf. Sjöberg 2004, 110-114, Takahashi 2009, 652-660. XVI号墓に関しては、後期青銅器時代IIIC期ではなく亜ミケーネ期に使用されたと判断している研究者も存在する (Hägg 1974, 80-82)。
 - 11 *Tiryys* VIII, 1-6, Mountjoy 1999, 66.
 - 12 Kilian-Dirlmeier 1984, 74, no.275, no.276.

ティリンスのアクロポリス周辺における後期青銅器時代IIIC期から 原幾何学文様期にかけての埋葬資料

ティリンスのアクロポリス周辺から発見された後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料について、公表されているデータを基に記載していく¹。各項目は、1) 墓の形態、2) 埋葬方法（土葬または火葬、埋葬姿勢など）、3) 副葬品、4) 特記事項である。

【アクロポリス北西方向の墓域】

報 告：Maran & Papadimitriou 2017, esp.63-72.²

時 期：原幾何学文様期

アクロポリスから北西方向に位置する調査区において2013～2015年にかけて発掘が行われ、原幾何学文様期および幾何学文様期の墓が確認された³。原幾何学文様期に関しては下記に記す資料以外にも土器が発見されているので、元来は他にも墓が存在したと推測される⁴。

・埋葬2/14 (Bestattung 2/14)

報 告：Maran & Papadimitriou 2017, 66, 101.

時 期：原幾何学文様期

おそらく原幾何学文様期の墓が存在したと推測される。

- 1) 不明
- 2) 土葬
- 3) 土器1個（水差し）？

・1/13号墓

報 告：Maran & Papadimitriou 2017, 70, 92, 101.

時 期：原幾何学文様期

- 1) 箱形石棺墓（内法で長さ0.47m、幅0.32m）
- 2) 土葬（生後6 - 9か月前後の幼児）
頭骨は北東の角に置かれていた。
- 3) 土器1個（円錐形の脚部を持つスキュフォス）

・ 2/15号墓から2m前後東方

報告：Maran & Papadimitriou 2017, 71-72, Abb.123.

時期：原幾何学文様期

おそらく原幾何学文様期の墓が存在したと推測される。

- 1) 不明
- 2) 土葬
- 3) 土器2個?

【35号墓周辺の出土土器】

報告：Tiryns I, 133, no.35:c, d, e, 138, 152, 158.

他の文献：Desborough 1952, 209, Styrenius 1967, 129, 135, Hägg 1974, 76, 80, 87, Takahashi 2009, 615.

時期：亜ミケーネ期

アクロポリスから北東方向の場所で発掘された幾何学文様期のピソス墓（35号墓）の周辺から、土器が3個出土した。その内1個は粗製土器で、他の2個は亜ミケーネ期の深鉢とアンフォリスコスである。元来はこれらの土器を副葬品とした亜ミケーネ期の墓が存在し、35号墓が作られた時に破壊された可能性があろう。

【調査区Mの18号墓】

報告：Tiryns I, 129, 141, 152.

他の文献：Desborough 1952, 209, Hägg 1974, 76, 83, 87, 115, 153, Papadimitriou 1998, 122, Lemos 2002, 43, Takahashi 2009, 615-616.

時期：原幾何学文様期

アクロポリスから北東方向の場所で発掘された。

- 1) 箱形石棺墓（長さ0.67m、幅0.4m）
- 2) 土葬

被葬者は小児である。頭蓋骨の下から乳歯が発見された。

- 3) 土器2個、粗製土器破片

水差し1個（高さ6.5cm）とスキュフォス（高さ5cm）が副葬されていた。さらに、粗製土器の破片も発見された。

- 4) 調査区Mであることについては、cf. Hägg 1974, 83. 調査区Mの場所については、cf. Tiryns V, Beilage 1.

【1999～2000年に発掘された墓】

報 告：Maran & Papadimitriou 2007, 121-122.

他の文献：*BCH* 125, 2001, 832, Takahashi 2009, 616.

時 期：原幾何学文様期

1999～2000年にアクロポリスから北東方向の場所で発掘が行われ、初期鉄器時代の墓が発見された（調査区の位置に関しては、cf. Maran & Papadimitriou 2007, 100, Abb.1）。その内、少なくとも1基は原幾何学文様期である。

・原幾何学文様期の墓

1) 箱形石棺墓

2) 土葬

被葬者はおそらく女性と推測されている⁵。

3) 青銅製小球が付いた鉄製ピン2本

・時期不明の墓

1) 箱形石棺墓

2) 土葬（伸展葬、子供）

3) 副葬品はなかった。

【1971/2号墓】

報 告：Gercke & Naumann 1974, 16-17, *Tiryns* VIII, 11, 17, no.29.

他の文献：Hägg 1974, 76, 80, 87, 111, Papadimitriou 1998, 122, Mountjoy 1999, 186, no.433, Takahashi 2009, 617-618.

時 期：後期青銅器時代IIIC期／亜ミケーネ期

アクロポリスから東方向に位置する調査区Hにおいて発見された。

1) 箱形石棺墓

蓋石は発見されなかった。

2) 土葬

小児の遺骨が散乱した状態で出土した。

3) 土器1個、青銅製リング2個

土器は下半分が黒く塗られたカップである。大きさは高さが7.1～7.4cm、口縁部の直径が8.4～9cm、底部の直径が3.8cmである。

青銅製リング2個の内、1個は直径が1.5cmである。

4) 上記の土器の時期に関しては、見解が分かれている。亜ミケーネ期という意見として、Gercke & Naumann 1974, 17, Hägg 1974, 80, *Tiryns* VIII, 11, Papadimitriou 1998, 121-122. 後期青銅器時代IIIC期後期という意見として、Mountjoy 1999, 186.

【アクロポリス西方 (Stadt-West) の墓域】

アクロポリスの西方 (Stadt-West) から、初期鉄器時代の墓が発見されている⁶ (図2)。現今の資料状況ではこの一帯における初期鉄器時代の最初期の墓は原幾何学文様期初期のものであるが、しかしパパディミトリウは亜ミケーネ期の墓も存在する可能性を示唆している⁷。

①1972に発掘された墓

報告：Gercke & Naumann 1974, 23-24.

他の文献：*BCH* 97, 1973, 299, Hägg 1974, 84, 87, 116, 135, 137, 157, Lemos 2002, 159, esp. n.104, Papadimitriou 2003, 719, 723, fig.4.

時期：原幾何学文様期

概報によると調査区Wにおいて1971年に開始された調査が1972年も継続され、原幾何学文様期もしくは幾何学文様期の墓が合計で9基発掘された。内訳は土壙墓が2基、ピソス墓が3基、そして箱形石棺墓が4基である⁸。管見の限りこれらの墓に関しては未だ詳細は不明であるが、複数の研究者が副葬品などのデータに言及している。ここではそれらの断片的な情報を集めて記載していく。

・1972/2号墓

文献：Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 723, fig.4, Takahashi 2009, 618-619.

時期：原幾何学文様期

1) 土壙墓か?⁹

方位は北東—南西方向もしくは南西—北東方向である¹⁰。

2) 不明¹¹ (子供)¹²。

3) 土器1個 (水差し)、鉄製ピン1本

・1972/3号墓

報告：Gercke & Naumann 1974, 23, fig.20, 24.

他の文献：Papadimitriou 2003, 723, fig.4, Takahashi 2009, 619.

時 期：原幾何学文様期か？

1) ピソス墓

遺存状態は悪い。ピソスの開口部（口縁）は西側である¹³。

2) 土葬

3) 土器片（おそらく原幾何学文様期）

4) この墓のすぐそばで、牛2頭と犬2匹の骨が発見され、犠牲にされたものと推測されている。

・ 1972/5号墓

文 献：Kilian-Dirlmeier 1984, 72, no.239, no.240, Lemos 2002, 106,

Papadimitriou 2003, 723, fig.4, Takahashi 2009, 619-620.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓

方位は東北東—西南西もしくは西南西—東北東方向である¹⁴。

2) 土葬

遺骸の姿勢に関しては仰臥と記載している文献がある¹⁵。

3) 土器2個（スキュフォス、水差し）、鉄製ピン2本

鉄製ピンには青銅製小球が付けられており、両肩に置かれていた。残存部の長さは16.5cmと15cmである。

・ 1972/8号墓

文 献：Papadimitriou 1998, 122, 124, fig.3, Lemos 2002, 28, 74, 233,

Papadimitriou 2003, 719, table 2, 723, fig.4, Takahashi 2009, 620.

時 期：原幾何学文様期¹⁶

1) 箱形石棺墓

方位は西北西—東南東もしくは東南東—西北西方向である¹⁷。

2) 土葬（子供）

3) 土器2個（カップ¹⁸、レキュトス¹⁹）²⁰、鉄製指輪1個²¹

・ 1972/9号墓

報 告：Gercke & Naumann 1974, 24, fig.23.

他の文献：Kilian-Dirlmeier 1984, 74, no.281, no.282, 300, Papadimitriou 1998,

124, table 3, Lemos 2002, 107, 233, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 723, fig.4, Takahashi 2009, 620-621.

時期：原幾何学文様期²²

1) 箱形石棺墓

方位は東北東—西南西もしくは西南西—東北東方向である²³。

2) 土葬（屈葬）²⁴

概報では被葬者は女性と記載されている。

3) 鉄製ピン2本、青銅製指輪1個、螺旋状金製品1個

鉄製ピン2本には骨製小球が付けられており、長さが60cm前後もある大型のものである（図3）。双方ともに布が付着していた。螺旋状金製品は髪の毛の装飾品とも推測されているが、確実なことは不明である²⁵。

②1974年に発掘された墓

報告：BCH 99, 1975, 613-617.

他の文献：Papadimitriou 2003, 719.

時期：原幾何学文様期

1974年に調査区Sにおいて、ミケーネ時代よりも遅い時期の墓が15基発掘された。内訳は12基が原幾何学文様期、2基が幾何学文様期、1基がビザンツ時代である²⁶。管見の限りこれらの墓に関しては未だ詳細が不明であるが、複数の研究者が副葬品などそれらの墓のデータに言及している。ここではそれらの断片的な情報を集めて記載していく。

・1974/1号墓

文献：Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 13, 233,

Papadimitriou 2003, 722, n.43, 723, fig.4, Takahashi 2009, 622.

時期：原幾何学文様期²⁷

1) 箱形石棺墓

方位は西北西—東南東もしくは東南東—西北西方向である²⁸。

2) 土葬2名

被葬者2名の内、少なくとも一人は子供である²⁹。パパディミトリウは、最初の埋葬のあとすぐ次の埋葬が行われたと推測している³⁰。

3) 土器2個（水差し、レキュトス）

・1974/3号墓

報 告：*BCH* 99, 1975, 614, fig.53, 615, fig.54.

他の文献：*Kilian-Dirlmeier* 1984, 71, no.219, no.220, 300, *Papadimitriou* 1998, 122, 124, table 3, *Lemos* 2002, 13, 60³¹, 68³², 72³³, 74, 104, 116, 233, *Papadimitriou* 2003, 716, table 1, 718, 719, 723, fig.4, *Takahashi* 2009, 622-624.

時 期：原幾何学文様期³⁴

1) 箱形石棺墓

方位は西北西—東南東もしくは東南東—西北西方向である³⁵。

2) 土葬（屈葬、若い人物）

3) 副葬品が多く厚葬であることは間違いないが、情報は錯綜している。まず土器についてである。パパディミトゥリウが1998年に発表された論文の中で、ある箇所では9個³⁶、別の箇所では7個と記載している³⁷。さらに氏は2003年の論文で、この墓の北東側の角から東方の場所で、レキュトスで蓋をされた胴部を取っ手がある大型のアンフォラが発見されたと記している³⁸。とすると、おそらく1974/3号墓の内部からは7個の土器が出土し、外部からさらに2個が発見されたのではないかと推測されよう。

9個の土器は胴部を取っ手があるアンフォラ（高さ43.2cm）、アンフォリスコス（高さ11.2cm）³⁹、オイノコエ、オイノコエ状小型土器（取っ手を含めない高さ7cm）⁴⁰、水差し、レキュトス3個、カンタロス（高さ8.9cm）⁴¹である。

アンフォラに関してはレモスがアッティカ製の可能性を示唆しており⁴²、別稿にて記した通り、筆者もその意見に賛成である⁴³。またこのアンフォラは墓の外から発見されたが、墓碑として使用されていたと指摘されている⁴⁴。さらに別の土器に関しては、キプロスとの関係が推測されている⁴⁵。

次に土器以外の副葬品についてである。この墓からは鉄製ピン2本、指輪、土製および石製（ステアタイト製）ビーズ6個が付いたプレスレット、さらに鉛製品⁴⁶が出土したと記載している文献がある⁴⁷。ピンからは布が検出された。一方でパパディミトゥリウは、この墓からは青銅製ピン2本と青銅製指輪2個が発見されたと記している⁴⁸。

・1974/6号墓

文 献：*Papadimitriou* 1998, 122, 124, table 3, *Lemos* 2002, 22, 43⁴⁹, 74, 233, *Papadimitriou* 2003, 719, table 2, 723, fig.4, *Takahashi* 2009, 624-625.

時 期：原幾何学文様期⁵⁰

1) 箱形石棺墓

方位は北東—南西もしくは南西—北東方向である⁵¹。

2) 土葬（子供）

3) 土器5個、鉄製指輪1個

土器はスキュフォス（高さ9.6cm）、三葉状口縁部のオイノコエ3個（高さはそれぞれ、17.6cm、17.3cm（図4）、16cm）、レキュトス（高さ11.8cm）である。

・ 1974/7号墓

文 献：Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 233,
Papadimitriou 2003, 718, n.18, 719, table 2, 722, n.43, 723, fig.4,
Takahashi 2009, 625-626.

時 期：原幾何学文様期⁵²

1) 箱形石棺墓

方位は東北東—西南西もしくは西南西—東北東方向である⁵³。

2) 土葬（2名、男性と子供）⁵⁴

3) 男性：鉄製指輪1個、子供：土器2個

子供の副葬品の土器は、三葉状の口縁部を有するオイノコエとカップである。さらに、数は不明であるが、墓の外からも土器が発見されたという⁵⁵。

・ 1974/8号墓

文 献：Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 35, 233,
Papadimitriou 2003, 723, fig.4, Takahashi 2009, 626.

時 期：原幾何学文様期⁵⁶

1) 箱形石棺墓

方位は東北東—西南西もしくは西南西—東北東方向である⁵⁷。

2) 土葬（子供）

3) 土器（スキュフォス）1個

・ 1974/10号墓

文 献：Kilian-Dirlmeier 1984, 71-72, no.222, no.223, 300, Papadimitriou 1998,
124, table 3, Lemos 2002, 106, 116, 226, Papadimitriou 2003, 719,
table 2, 723, fig.4, Takahashi 2009, 626-627.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓

方位は東北東—西南西もしくは西南西—東北東方向である⁵⁸。

2) 土葬

被葬者は男性とされており、遺骸の姿勢に関してはうつ伏せと記載する文献がある⁵⁹。

3) 鉄製ピン2本、青銅製指輪1個、プレスレット1個

鉄製ピン2本は青銅製小球が付されたものであり、また布が付着していた(図5)。プレスレットにはファイアンス製ビーズが付けられていた。

・ 1974/11号墓

報 告：*BCH* 99, 1975, 615, fig.55.

文 献：Kilian-Dirlmeier 1984, 71, no.210, no.211, 74, no.275, no.276, 301, Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 43⁶⁰, 59, 62, 65, 70⁶¹, 79, 104, 107, 116, 226, 233, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 722, n.43, 723, fig.4, Takahashi 2009, 627-629.

時 期：原幾何学文様期⁶²

1) 箱形石棺墓

方位は東北東—西南西もしくは西南西—東北東方向である⁶³。

2) 土葬(成人2名、女性と男性)

3) パパディミトリウとレモスによれば女性とされている遺骸の副葬品は土器4個、青銅製ピン2本、青銅製指輪3個、鉄製ピン2本である。土器は頸部から肩にかけて取っ手があるアンフォリスコス(高さ12.3cm)⁶⁴、水差し(高さ9.7cm)、スキュフォス2個(図6①：高さ8.1cm、図6②：8.7cm)である。一方で男性とされている遺骸の副葬品は土器3個で、頸部から肩にかけて取っ手があるアンフォラ(高さ18.6cm、図7)、肩に取っ手があるアンフォラ(高さ18cm、図8)、ピュクシス(高さ13.8cm、図9)である⁶⁵。

また他の文献によれば下方にあった遺骸の副葬品として、青銅製ピン2本(図10)、象牙製小球が付された鉄製ピン2本、指輪、石製およびファイアンス製ビーズ⁶⁶、土器4個(スキュフォス2個、水差し、アンフォラ)が発見されたという。鉄製ピンには布が付着していた。

さらに概報の写真には動物型土製品と推測される遺物が写っており⁶⁷、またこの墓から馬型土製品が出土したと記す文献もある⁶⁸。

・ 1974/12号墓

文 献：Kilian-Dirlmeier 1984, 74, no.279, no.280, 301, Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 107, 115, 226, 233, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 723, fig.4, Takahashi 2009, 629-631.

時 期：原幾何学文様期⁶⁹

1) 箱形石棺墓

方位は東北東—西南西もしくは西南西—東北東方向である⁷⁰。

2) 土葬 (若い人物)

3) 土器5個、鉄製ピン2本、青銅製プレスレット1個、螺旋状青銅製品1個、ファイアンス製ビーズ

土器はアンフォラ、三葉状口縁部を有するオイノコエ2個 (高さはそれぞれ、12.7cm、12cm)、スキュフォス (高さ9.1cm)、カップ (高さ9.4cm) である。鉄製ピン2本には骨製⁷¹小球が付されており、また布が付着していた。

・ 1974/13号墓

文 献：Kilian-Dirlmeier 1984, 73, no.251, no.252, 301, Papadimitriou 1998, 124, table 3, Lemos 2002, 106, 116, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 723, fig.4, Takahashi 2009, 631.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓

方位は北東—南西もしくは南西—北東方向である⁷²。

2) 土葬

遺骸の姿勢に関しては仰臥と記載している文献がある⁷³。また被葬者は若い人物とされている。

3) 鉄製ピン2本、青銅製指輪1個、螺旋状青銅製品1個、黒色石製ビーズ
鉄製ピンには青銅製小球が付されており、また布が付着していた。

【農業刑務所の墓域】

テイリンスの城塞から150mほど南方に所在する農業刑務所 (Αγροτική Φυλακή) において1957年に発掘調査が行われ、亜ミケーネ期から幾何学文様期にかけての28基の墓が発見された⁷⁴ (図11)。

・V号墓

報 告：Verdelis 1963, 26-27.

他の文献：Desborough 1972, 168, pl.33A, Hägg 1974, 76, 82, 116, Kilian-Dirlmeier 1984, 72, no.229, Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 29, 106, 233, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 721, n.37, Takahashi 2009, 632-633.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓（長さ1.40m、幅0.50-0.56m、深さ0.35-0.38m）

地表面から1.4m下方で発見され、板状の石で蓋をされていた。方位は南西—北東方向である⁷⁵。

2) 土葬（屈葬）

頭部は南西方向に置かれていた。

3) 鉄製ピン1本、土器2個、青銅製プレスレット？

鉄製ピンは長さ29cmで、青銅製小球が付されていた。土器は胴部に水平の取っ手があるアンフォラ（高さ23cm）⁷⁶とカップ（高さ6.5cm、口縁部直径8.5cm）である。また左手の下に金属による緑色の痕跡が発見されたため、おそらく青銅製プレスレットが存在したと推測されている。

・VI号墓

報 告：Verdelis 1963, 27-28.

他の文献：Desborough 1972, 165, Hägg 1974, 76, 82, 116, Kilian-Dirlmeier 1984, 71, no.205, no.206, 72, no.247, no.248, Papadimitriou 1998, 124, table 3, Lemos 2002, 104, 106, 116, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 721, n.37, 722, n.41, Takahashi 2009, 633-635.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓（長さ1.45m、幅0.68-0.70m、深さ0.38-0.40m）

地表面から1.30m下方で発見された。方位は北北西—南南東方向である⁷⁷。複数の板で覆われていた。

2) 土葬（屈葬）

頭部は北側に置かれていた。被葬者の身長はおそらく1.65mと報告されている。副葬品から女性と推測されている。

3) 青銅製指輪3個、青銅製ピン2本、鉄製ピン2本

鉄製ピンには双方ともに青銅製小球が付されていた。土器は副葬されていない

かった。

・VII号墓

報告：Verdelis 1963, 28-30.

他の文献：Hägg 1974, 76, 82, 116, 135, Kilian-Dirlmeier 1984, 72, no.231, no.232, Papadimitriou 1998, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 106, 116, 127, 160, n.109, 233, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 721, n.37, n.38, 722, n.41, Takahashi 2009, 635-636.

時期：原幾何学文様期⁷⁸

1) 箱形石棺墓（長さ1.30m、幅0.57-0.65m、深さ0.40-0.50m）

地表面から1.86m下方で発見された。方位は南西—北東方向である⁷⁹。板状の石2個で覆われていた。

2) 土葬2名（屈葬）

被葬者は2名で異なる層位に埋葬されていた。

深い方の層から発見された遺体は屈葬で、頭部は南西側に置かれていた。この遺骸は埋葬された元来の状態で発見され、また副葬品からおそらく女性と推測されている。

別の遺体も、前者と同様の姿勢で埋葬されていたと思われる。

3) おそらく女性と推測されている遺骸の副葬品として、青銅製指輪4個、青銅製小球が付いた鉄製ピン2本（残存部の長さは18cmと14cm）、螺旋状金製品（直径1.3cm）、また頭蓋骨の下から青銅製薄片が発見された。土器は出土しなかった。

もう一方の遺骸に関しては、副葬品は発見されなかった。

・XIIIaおよびXIIIb号墓

報告：Verdelis 1963, 6-10.

他の文献：Styrenius 1967, 129, 135, 136, Hägg 1974, 76, 80, 102, 156, 158, Mountjoy 1999, 192, no.455, no.456, no.459, 194, no.464, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 721, n.37, 722, n.40, Takahashi 2009, 636-638.

時期：亜ミケーネ期

XIIIa号墓とXIIIb号墓は隣接しており、板状の石と一緒に覆われていた。方位は西南西—東北東方向で⁸⁰、蓋石を除いた状態で両者合わせた墓壙の大きさは長さ2.10m、幅1.60mである。地表面からの深さは異なっており、XIIIa号墓

は深さ1.46m、XIIIb号は1.64mである。発掘報告ではより深い場所にあるXIIIb号墓の方が古いと判断されている。

[XIIIa号墓]

1) 土壙墓

2) 土葬（横臥屈葬）

左側に傾斜した横臥である。頭部は南西方向に位置し、両手は腹部の上に置かれていた。被葬者は男性とされており、おそらく身長は1.70-1.75mと推測されている。

3) 青銅製指輪2個、土器1個（水差し、高さ9.9cm）

[XIIIb号墓]

1) 土壙墓

2) 土葬（横臥屈葬）

右側に傾斜した横臥である。頭部は南西方向に位置し、両手は腹部の上に置かれていた。被葬者は副葬品から女性と推測されている。

3) 青銅製指輪4個、青銅製フィブラ1個、土器3個

土器は独特の取っ手と三葉状口縁部を持つ水差し（取っ手を含めた高さ15.2cm、取っ手を含めない高さ9.8cm）、水差し（高さ8.9cm）、フラスコ状の土器（高さ11.6cm）である。フラスコ状の土器に関しては別稿にて記した通りクレタ製の可能性が指摘されており、亜ミノア期と判断されている⁸¹。

・XV号墓

報 告：Verdelis 1963, 31-32.

他の文献：Hägg 1974, 76, 82, 116, Kilian-Dirlmeier 1984, 72, no.241, no.242, Papadimitriou 1998, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 106, 116, 127, 233, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 721, n.37, 722, n.41, Takahashi 2009, 638-639.

時 期：原幾何学文様期⁸²

1) 箱形石棺墓（長さ1.30-1.40m、幅0.57-0.60m、深さ0.46m）

大型の石1個で蓋をされていた。方位は南西—北東方向である⁸³。

2) 土葬（屈葬）

頭部は南西方向に置かれていた。副葬品から女性と推測されている。

3) 青銅製指輪 2 個、青銅製小球が付いた鉄製ピン 2 本、螺旋状金製品 2 個 (直径1.5cm)、螺旋状青銅製品 1 個 (直径1.7cm)

鉄製ピンの長さは、1 つは完全な状態で28cm、もう 1 つは残存部が14cmである。土器は出土しなかった。

・ XVIII号墓

報 告 : Verdelis 1963, 35.

他の文献 : Hägg 1974, 76, 82, 116, Kilian-Dirlmeier 1984, 72, no.233, no.234, 300, Papadimitriou 1998, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 106, 116, 233, Papadimitriou 2003, 719, table 2, 721, n.37, Takahashi 2009, 639-640.

時 期 : 原幾何学文様期⁸⁴

1) 箱形石棺墓 (長さ1.30m、幅0.62-0.75m、深さ0.45m)

地表面から1.6m下方で発見された。方位は南西—北東方向である⁸⁵。

2) 土葬 (屈葬)

頭部は南西側に置かれていた。おそらく女性と推測されている。

3) 青銅製指輪 2 個、青銅製小球が付けられた鉄製ピン 2 本

鉄製ピンの長さは29cmと25cmで⁸⁶、布が付着していた。

・ XXIV号墓

報 告 : Verdelis 1963, 54.

他の文献 : Hägg 1974, 76, 83, 137, Lemos 2002, 160, n.105, Papadimitriou 2003, 722, n.42, Takahashi 2009, 640-641.

時 期 : 不明

発掘報告ではこの墓の副葬品が原幾何学文様期と判断されているが、必ずしも確実ではない⁸⁷。

1) ピソス墓

2) 土葬

3) 土製品 1 個 (高さ2.5cm)

・ XXVI号墓

報 告 : Verdelis 1963, 41-42.

他の文献 : Desborough 1972, 168, pl.33B, Hägg 1974, 76, 83, 116, Kilian-Dirlmeier 1984, 94-95, no.455, no.480, 99, no.576, Papadimitriou

1998, 122, Lemos 2002, 22, 29, 160, n.110, n.111, 233, Papadimitriou 2003, 721, n.36, Takahashi 2009, 641-642.

時 期：原幾何学文様期⁸⁸

XXIII号墓に隣接している。同じ場所が複数回の埋葬に使用されており、不確実なことが多い。発掘報告では墓とは記されておらず、埋葬（Bestattung XXVI）と表記されている⁸⁹。

1) 不明

写真では墓壙の存在すら不明である⁹⁰。

2) 土葬⁹¹

遺骨が散乱した状態で発見された。

3) 青銅製ピン3本、槍先の鉄片、黒曜石製矢じり2個、土器1個が発見されたが、それらすべてがこの墓の埋葬に伴うものか否かは不明である。土器は円錐形の高脚を有するカップ（高さ10cm）である。

・XXVⅢ号墓

報 告：Verdelis 1963, 10-24.

他の文献：AR 1957, 1958, 8-9, BCH 82, 1958, 707, AE 1956, 1959, 4, AD 16, B', Chronika: 1960, 1962, 80-81, Snodgrass 1964, 118, no. A6, Styrenius 1967, 129, 135-136, Snodgrass 1971, 220-221, 224, 317-319, Desborough 1972, 69-72, Hägg 1974, 76, 80, 101-102, 156, 158, Mountjoy 1993, 30, 160-161, Mountjoy 1999, 55, 79, 194, no.461, Lemos 2002, 13, 120, 122, 124, 160, n.109, n.111, 233, Papadimitriou 2003, 716, 719, table 2, 721, n.37, Takahashi 2009, 642-643.

時 期：亜ミケーネ期／原幾何学文様期⁹²

1) 土壙墓（長さ1.17m、幅0.63m、深さ0.57m）

地表面から1.15m下方で発見された。板状の石2個で蓋をされていた。方位は西南西—東北東方向である⁹³。

2) 土葬（2名、屈葬）（図12）

2名の遺骸が発見された。両方とも屈葬で、頭部は南西方向に置かれていた。北側の被葬者には武器が副葬されていたので、戦士と推測されている。もう一方の遺骸はより深い場所から出土したので、こちらの方が先に埋葬されたと判断されている。

3) 土器1個、青銅製指輪2個、青銅製槍先1個、青銅製円形突起1個（直径

10.5cm、図13)、鉄製短剣2本(図14)、青銅製兜1刎(図15)

土器は鏡壺(高さ13.6cm)である。青銅製円形突起は、おそらく盾に付けられたもの(shield boss)と推測されている。これらの遺物はすべて戦士と推測されている遺骸の副葬品である。一方別の被葬者に関しては、副葬品は発見されなかった。ただし、二度目の埋葬が行われた際に除去された可能性も指摘されている⁹⁴。

【農業刑務所周辺の墓】

・AD 24, B'1, *Chronika:1969* (οικόπεδο Δασκαλάκου) の墓

報告: AD 24, B'1, *Chronika: 1969*, 1970, 104.

他の文献: Hägg 1974, 76, 83-84, 87, 116, Kilian-Dirlmeier 1984, 73, no.267, Lemos 2002, 22, 106, 115, 116, 159, n.103, 160, n.108, n.113, 233, Takahashi 2009, 643-644.

時期: 原幾何学文様期⁹⁵

場所は農業刑務所の入り口の向かい側である。この墓以外に同じ敷地内から、原幾何学文様期のアンフォラの破片が発見された。

1) 箱形石棺墓(内法で長さ0.70m、幅0.50m)

板状の石で蓋をされていた。

2) 土葬(屈葬、子供)

頭部は西側に置かれていた。

3) 土器6個、青銅製プレスレットの破片、鉄製指輪1個、青銅製指輪4個、青銅製小球が付いた鉄製ピン1本⁹⁶、小型の製品1個⁹⁷

土器はアンフォラ(もしくはアンフォリスコス)3個とスキュフォス3個である⁹⁸。

・AD 35, B'1, *Chronika:1980* (Οικόπεδο Αγροτικών Φυλακών) の墓域

報告: AD 35, B'1, *Chronika: 1980*, 1988, 123-125.

他の文献: Lemos 2002, 159, n.102, 233, Takahashi 2009, 644.

時期: 亜ミケーネ期、原幾何学文様期

1980年に農業刑務所の建造物の向かいの敷地で緊急発掘が行われ、初期青銅器時代と初期鉄器時代の二つの層が確認された。初期鉄器時代に関しては46基の墓が発掘され、時期は亜ミケーネ期、原幾何学文様期、幾何学文様期にわたっている。墓の種類は箱形石棺墓、ピソス墓および土壙墓で、すべての墓において遺骸

は1体であった。遺骸の姿勢は仰臥屈葬で、遺体の方位は多くが南東—北西方向と報告されている。副葬品の大半は土器で鏡壺、三葉状口縁部を持つオイノコエ、カップ、カンタロス、スキュフォス、レキュトスなどが発見された。青銅製品や鉄製品も発掘されている。また幾何学文様期の壁の一部も検出された。

【*Tiryns* I の1号墓】

報 告：*Tiryns* I, 128, 152, 158.

他の文献：Desborough 1952, 207, Hägg 1974, 83, 115, Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.316, Papadimitriou 1998, 122, Lemos 2002, 22, 39, 233, Takahashi 2009, 644-645.

時 期：原幾何学文様期⁹⁹

- 1) 箱形石棺墓
- 2) 土葬
- 3) 土器2個、鉄製ピン1本

土器はスキュフォス（高さ11cm）と粗製土器（高さ11cm）である。

4) この墓の場所について、アクロポリスの南西方向で道路のすぐそばであると記載する文献がある¹⁰⁰。

【調査区Aの墓域】¹⁰¹

亜ミケーネ期から幾何学文様期に至る時期の墓が発見された（図16）。この内5、9、10、13および15号墓に関しては正確な時期は不明であるが、その内の幾つかは原幾何学文様期であると推測する研究者も存在する¹⁰²。また6号墓についてはパパディミトゥリウが原幾何学文様期と記載しているが¹⁰³、それよりも遅い時期と思われるため以下のリストからは除外することとする。さらに12号墓に関しては¹⁰⁴、デズボロが原幾何学文様期と判断しているが¹⁰⁵、むしろ初期幾何学文様期と見なされるためやはりリストには記載しないこととする¹⁰⁶。またこの墓域の墓は一般的に副葬品が多くはないと指摘されている¹⁰⁷。

・2号墓

報 告：*Tiryns* I, 128, 137-138, 150, 155.

他の文献：Desborough 1952, 207-208, Hägg 1974, 85, n.344, 118, Kilian-Dirlmeier 1984, 85, no.335, Papadimitriou 1998, 122, Papadimitriou 2003, 716, table 1, 720, n.35, Coldstream 2008, 113, Takahashi 2009, 645-646.

時 期：原幾何学文様期 / 初期幾何学文様期

1) 箱形石棺墓

方位は北東—南西方向もしくは南西—北東方向である¹⁰⁸。

2) 土葬

3) 土器3個、鉄製ピン1本、青銅製指輪1個、螺旋状金製品1個

土器は胴部に水平の取っ手があるアンフォラ（高さ33cm）、スキュフォス（高さ10.5cm）、カラソス（取っ手を除外した高さ10cm）である。鉄製ピンには象牙製の小球が付いていた。

・ 3号墓

報 告： *Tiryns* I, 128, 138.

他の文献： Desborough 1952, 208, Desborough 1964, 19, 79-80, Styrenius 1967, 129, 134-136, Hägg 1974, 76, 80, 82, 111, Papadimitriou 1998, 122, Papadimitriou 2003, 716, table 1, 720, n.35, Takahashi 2009, 646.

時 期：亜ミケーネ期

1) 箱形石棺墓（長さ0.8m、幅0.5m）

方位は北北東—南南西方向もしくは南南西—北北東方向である¹⁰⁹。

2) 土葬（子供）

3) 土器1個（アンフォリスコス、高さ9cm）

・ 4号墓

時 期： *Tiryns* I, 128, 152.

他の文献： Desborough 1952, 208, Hägg 1974, 76, 82, 115, Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 38, 159, n.101, 233, Papadimitriou 2003, 716, table 1, 719, table 2, 720, n.35.

時 期：原幾何学文様期¹¹⁰

1) 箱形石棺墓

方位は北東—南西方向もしくは南西—北東方向である¹¹¹。

2) 土葬

3) 土器1個、金属製品（鉄製ピンか）？

土器はスキュフォス（高さ11cm）である。遺骸の胸部があった場所から金属（鉄？）の痕跡が検出されたため、おそらくはピンが副葬されていたと推察されている。

・ 7号墓

報 告： *Tiryns* I, 129.

他の文献： Hägg 1974, 76, 82, 115, Kilian-Dirlmeier 1984, 71, no.217, 73, no.270, Papadimitriou 1998, 124, table 3, Lemos 2002, 104, 106, 116, 159, n.101, Papadimitriou 2003, 716, table 1, 719, table 2, 720, n.35, Takahashi 2009, 647-648.

時 期：原幾何学文様期

1) 箱形石棺墓

方位は北東—南西方向もしくは南西—北東方向である¹¹²。

2) 土葬

3) 青銅製ピン1本、鉄製ピン1本、青銅製指輪1個（直径2cm）、青銅製の破片2個¹¹³

青銅製ピンは上端に円盤、その下に小球が付されており、長さは26.5cmであった。鉄製ピンは青銅製小球が付けられており、13cmと報告されている。土器は副葬されていなかった。

・ 8号墓

報 告： *Tiryns* I, 129, 152, 158.

他の文献： Desborough 1952, 101, 208, Hägg 1974, 76, 82, 115, Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 32, 89, 159, n.101, 233, Papadimitriou 2003, 716, table 1, 720, n.35.

時 期：原幾何学文様期¹¹⁴

1) 箱形石棺墓

2) 土葬

3) 土器2個

土器は粗製ヒュドリア（高さ31cm）と円錐形の脚部を持つカップ（高さ9cm）である。別稿にて記した通り、カップはアッティカからの搬入品である可能性が指摘されている¹¹⁵。

・ 9号墓

報 告： *Tiryns* I, 129.

他の文献： Hägg 1974, 76, 82, 116, 118, Lemos 2002, 22, 233.

時 期：不明

レモスはこの墓を原幾何学文様期後期と見なしているが、副葬品がないため正確な時期を判断することは不可能である¹¹⁶。

- 1) 箱形石棺墓
- 2) 不明
- 3) 副葬品なし

・ 10号墓

報 告 : *Tiryns* I, 129.

他の文献 : Hägg 1974, 76, 82, 115, Papadimitriou 1998, 124, table 3, Papadimitriou 2003, 716, table 1, 719, table 2, 720, n.35.

時 期 : 不明 (原幾何学文様期か?)¹¹⁷

- 1) 箱形石棺墓
- 2) 不明
- 3) 小型の鉄製品が発見され、ピンの小球ではないかと推測されている。発掘報告には記載が無いが、パパディミトリウはそれ以外にもさらに青銅製指輪 1 個と螺旋状金製品 1 個が出土したことを記している¹¹⁸。

・ 11号墓

報 告 : *Tiryns* I, 129, 141.

他の文献 : Desborough 1952, 57, 208, Hägg 1974, 76, 82, 115, Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 22, 70, 233, Papadimitriou 2003, 716, table 1, 718, n.18, 720, n.35.

時 期 : 原幾何学文様期¹¹⁹

- 1) 箱形石棺墓
方位は北東—南西方向もしくは南西—北東方向である¹²⁰。
- 2) 土葬
- 3) 土器 1 個、墓の外部にも土器か?

三葉状口縁部を有するオイノコエ 1 個 (高さ 30cm) が副葬されていた。さらに墓の上から土器片が発見された¹²¹。

【*Tiryns* I の 17号墓】

報 告 : *Tiryns* I, 129, 141, 152.

他の文献 : Desborough 1952, 209, Hägg 1974, 83, 115, Papadimitriou 1998, 122,

Lemos 2002, 22, 29¹²², 233.

時 期：原幾何学文様期¹²³

この墓の所在地は不明である。

- 1) 箱形石棺墓（長さ0.6m、幅0.4m）
- 2) 土葬（子供）
- 3) 土器 2 個

円錐形の脚部を持つカップ（高さ9.5cm、図17）と注口を持つ三葉状口縁のオイノコエ（高さ14cm）である。

【1972/18号墓】

文 献：Lemos 2002, 13.

時 期：原幾何学文様期¹²⁴

管見の限り、場所に関しては情報が無い。

- 1) 不明
- 2) 不明
- 3) 少なくとも土器 2 個

カップ（高さ7.7cm、図18）とレキュトス（高さ10.7cm、図19）である。

-
- 1 筆者はかつて調査区Hから発見されたピソス墓（*Tiryys* V, 17）について原幾何学文様期／初期幾何学文様期と記載したことがあるが（Takahashi 2009, 617）、本稿作成に際して初期幾何学文様期と判断し、このリストからは除外することとする。Cf. Hägg 1974, 85.
 - 2 隣接する場所で継続された調査として、cf. Maran & Papadimitriou 2021.
 - 3 調査区の場所は、cf. Maran & Papadimitriou 2017, 21, Abb.1, Maran & Papadimitriou 2021, 68, Abb.1.
 - 4 Maran & Papadimitriou 2017, 69, Abb.117.
 - 5 副葬品からの推量であろう。
 - 6 この墓域に関する記載として、cf. Papadimitriou 2003, 722-723.
 - 7 Papadimitriou 2003, 717, n.14.
 - 8 Gercke & Naumann 1974, 23-24. 3～4基が原幾何学文様期で、それ以外が幾何学文様期であると記載されている。
 - 9 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
 - 10 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
 - 11 おそらく土葬であろう。
 - 12 Papadimitriou 1998, 124, table 3.

- 13 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 14 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 15 Killian -Dirlmeier 1984, 72, no.239, no.240.
- 16 原幾何学文様期初期という意見として、Lemos 2002, 233.
- 17 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 18 Lemos 2002, 28.
- 19 Lemos 2002, 74.
- 20 レモスはさらにこの墓からはアンフォラが1個出土したと記しているが (Lemos 2002, 13)、これは1974/3号墓の間違ひではないかと思われる (Lemos 2002, 60, pl.20.1)。
- 21 鉄製指輪に関しては、cf. Papadimitriou 2003, 719, table 2.
- 22 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 233.
- 23 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 24 写真から屈葬と判断した (Gercke & Naumann 1974, 24, fig.23)。
- 25 Gercke & Naumann 1974, 24.
- 26 *BCH* 99, 1975, 613.
- 27 原幾何学文様期初期という意見として、Lemos 2002, 233.
- 28 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 29 Papadimitriou 1998, 124, table 3.
- 30 Papadimitriou 2003, 722, n.43.
- 31 この頁で言及されているティリンス出土のアンフォラは、1974/3号墓のものである。
- 32 この頁で言及されているティリンス出土のオイノコエは、1974/3号墓のものである。
- 33 この頁で言及されているティリンス出土のレキュトス2個は、1974/3号墓のものと同推測される。ただし、引用文献の図版の記載に誤りがあり、“*BCH* 99 (1975), 615, fig.1-2” と記されているが、“*BCH* 99 (1975), 615, fig.54” ではないかと思われる。
- 34 原幾何学文様期初期という意見として、Lemos 2002, 233.
- 35 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 36 Papadimitriou 1998, 122, table 1.
- 37 Papadimitriou 1998, 124, table 3.
- 38 Papadimitriou 2003, 718.
- 39 パパディミトゥリウはこの墓からはアンフォラが2個出土していると記しているが (Papadimitriou 1998, 122, table 1)、レモスによれば1個はアンフォリスコスである (Lemos 2002, pl.20:3)。
- 40 パパディミトゥリウはこの墓からはオイノコエが2個出土したと記載しているので (Papadimitriou 1998, 122, table 1)、おそらくこの土器をオイノコエと見なしていると推測される。一方でレモスはこの土器をオイノコエの項目で紹介しながら、写真の解説では“jug” と記している (Lemos 2002, 68, pl.20:5)。
- 41 レモスはこの土器をカンタロスと記している (Lemos 2002, pl.20:4)。パパディミトゥリウの表にはカンタロスがなく、一方でカップが出土したとされている (Papadimitriou 1998, 122, table 1)。
- 42 Lemos 2002, 60.
- 43 拙稿「ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代IIC期から原幾何学文様期にかけ

- ての対外関係」『西洋史研究』新輯第49号、2020年（以下、拙稿2020年）、73頁、図6。
- 44 Papadimitriou 2006, 539-540.
- 45 Papadimitriou 2006, 540.
- 46 “Stempelanhänger aus Blei, runde Platte mit Kreuzsteg, durchbrochen” (Kilian-Dirlmeier 1984, 71, no.219, no.220).
- 47 Kilian-Dirlmeier 1984, 71, no.219, no.220.
- 48 Papadimitriou 2003, 719, table 2.
- 49 “2.3.4.2 The skyphos with a decoration of triangles” のティリンスの項目のpl.57.5の土器がこの墓の遺物である (Lemos 2002, 43)。
- 50 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 51 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 52 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 53 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 54 Papaditmiriou 1998, 124, table 3.
- 55 Papadimitriou 2003, 718, n.18.
- 56 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 57 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 58 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 59 Kilian-Dirlmeier 1984, 71, no.222, no.223.
- 60 “2.3.4.2 The skyphos with a decoration of triangles” のティリンスの項目のpl.56.6の土器がこの墓の遺物である (Lemos 2002, 43)。
- 61 三葉状口縁部を有するオイノコエに関する項目で、*BCH* 99, 1975, fig.55が引用されているが、その写真 (fig.55) にオイノコエは掲載されていない。
- 62 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 63 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 64 小型なのでアンフォラよりはアンフォリスコスと記載する方が適切であろう。Cf. Lemos 2002, 65, pl.56.4.
- 65 Papadimitriou 1998, 122, 124, table 3, Lemos 2002, 43, 59, 62, 65, 79, 104, 107, 116, 226, pl.56.
- 66 Cf. Lemos 2002, 226.
- 67 *BCH* 99, 1975, 615, fig.55. 左から二番目の遺物である。
- 68 Kilian-Dirlmeier 1984, 71, no.210, no.211.しかし、Kilian-Dirlmeier 1984, 74, no.275, no.276には記載がない。
- 69 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 70 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 71 象牙製と記載している文献もある (Lemos 2002, 107)。しかし、cf. Kilian-Dirlmeier 1984, 74, no.279, no.280.
- 72 Cf. Papadimitriou 2003, 723, fig.4.
- 73 Kilian-Dirlmeier 1984, 73, no.251, no.252. おそらく仰臥伸展葬ではないかと推測される。
- 74 III号墓を原幾何学文様期と見なす意見もあるが (Papadimitriou 2003, 721, n.37)、筆者はそれに賛成できないので、以下のリストからは除外することとする。

- 75 北東—南西方向と報告されているが (Verdelis 1963, 26)、頭部が南西方向なのでこのように記載した。
- 76 アンフォリスコスと報告されているが (Verdelis 1963, 27, no.2)、むしろアンフォラという方が適切であろう。レモスはこの土器を原幾何学文様期後期と見なしている (Lemos 2002, 61)。
- 77 北—南方向と報告されているが、図面からこのように判断した (Verdelis 1963, 27, Tafel 1)。
- 78 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 79 北東—南西方向と報告されているが (Verdelis 1963, 28)、頭部が南西側に位置しているのでこのように記載した。
- 80 Verdelis 1963, Tafel 1.
- 81 拙稿2020年、72, 73 (図3) 頁。
- 82 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 83 北東—南西方向と報告されているが (Verdelis 1963, 31)、頭部が南西側に位置しているのでこのように記載した。
- 84 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 85 北東—南西方向と報告されているが (Verdelis 1963, 35)、頭部が南西側に位置しているのでこのように記載した。
- 86 Verdelis 1963, 35. 他の文献では、この墓出土の鉄製ピンの1つの長さについて28.2cmと記しているものもある (Kilian-Dirlmeier 1984, 72, no.233, no.234)。
- 87 Cf. Hägg 1974, 83.
- 88 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 89 Verdelis 1963, 41-42.
- 90 Verdelis 1963, Beilage 9:3.
- 91 XXVI号墓一帯での埋葬に関しては、時期や回数など不明な点が多い。Cf. Verdelis 1963, 42, Papadimitriou 2003, 721, n.36.
- 92 XXVIII号墓の副葬品の内、土器は亜ミケーネ期であるが、金属製の武具は原幾何学文様期に属する。この墓の時期に関しては研究者により意見が異なるが、亜ミケーネ期から原幾何学文様期への移行期と見なすことが最も適切であろう。Cf. Lemos 2002, 13, n.83, 233, Papadimitriou 2003, 721, n.37.
- 93 北東—南西方向と報告されているが、頭部の位置および図面からこのように判断した。Cf. Verdelis 1963, 10, Tafel 1.
- 94 Mountjoy 1993, 160.
- 95 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 96 モリスは青銅製に見えるように青銅でコーティングされた鉄製ピンと記しているが、そうではないであろう (Morris 2000, 216)。
- 97 “μικρὸν μυκηναϊκοῦ τύπου κολουροκωνικὸν κομβίον” (*AD* 24, B'1, *Chronika: 1969*, 1970, 104), “... 1 Spinnwirtel mykenischen Typs” (Hägg 1974, 84) .
- 98 Cf. *AD* 24, B'1, *Chronika: 1969*, 1970, 104, Kilian-Dirlmeier 1984, 73, no.267.
- 99 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 100 Hägg 1974, 83. 墓の位置に関してはさらに、cf. *Tiryns* I, 128.

- 101 調査区の名称に関しては、Papadimitriou 2003, 720, 721, fig.2.
- 102 Hägg 1974, 82. さらに、cf. Lemos 2002, 159, esp. n.101.
- 103 Papadimitriou 2003, 720, n.35.
- 104 *Tiryys* I, 129, 141, 151, 159.
- 105 Desborough 1952, 208, n.2. デズボロは実際にこの土器を見たわけではないことが記されている。
- 106 Courbin 1966, 221, Hägg 1974, 76, 85, n.344, 118, Takahashi 2009, 650.
- 107 Papadimitriou 2003, 720.
- 108 図版からの判断である (Papadimitriou 2003, 721, fig.2)。
- 109 図版からの判断である (Papadimitriou 2003, 721, fig.2)。
- 110 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 111 図版からの判断である (Papadimitriou 2003, 721, fig.2)。
- 112 図版からの判断である (Papadimitriou 2003, 721, fig.2)。
- 113 “zwei Stücke Bronzedraht” (*Tiryys* I, 129).
- 114 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 115 拙稿2020年、73-74頁。Cf. Desborough 1952, 101, 208, Lemos, 2002, 32.
- 116 Lemos 2002, 22, 233. Cf. Hägg 1974, 82, 116, 118.
- 117 原幾何学文様期という意見として、Papadimitriou 2003, 720, n.35.
- 118 Papadimitriou 2003, 719.
- 119 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 120 図版からの判断である (Papadimitriou 2003, 721, fig.2)。
- 121 *Tiryys* I, 129. Cf. Papadimitriou 2003, 718, n.18.
- 122 “*Tiryys* i. 129, pl.17.15” と記されているが、“*Tiryys* i.129, pl.18.15” の誤りである。
- 123 原幾何学文様期後期という意見として、Lemos 2002, 22, 233.
- 124 原幾何学文様期初期という意見として、Lemos 2002, 13.

略記一覧

Tiryys I

A. Frickenhaus *et al.*, *Tiryys I: Die Ergebnisse der Ausgrabungen des Instituts*, Athen, 1912.

Tiryys V

U. Jantzen ed., *Tiryys V: Forschungen und Berichte*, Mainz am Rhein, 1971.

Tiryys VI

U. Jantzen ed., *Tiryys VI: Forschungen und Berichte*, Mainz am Rhein, 1973.

Tiryys VIII

U. Jantzen ed., *Tiryys VIII: Forschungen und Berichte*, Mainz am Rhein, 1975.

文献一覧

Brysbaert, A. & M. Veters 2015: Mirroring the Mediterranean? Artisanal Networking in 12th Century BC Tiryns, in A. Babbi *et al.* eds., *The Mediterranean Mirror: Cultural*

Contacts in the Mediterranean Sea between 1200 and 750 B.C. —International Post-doc and Young Researcher Conference Heidelberg, 6th-8th October 2012, RGZM-Tagungen 20, Mainz, 161-175.

Cavanagh, W. & C. Mee 1998: *A Private Place: Death in Prehistoric Greece*, Jonsered.

Coldstream, J. N. 2008: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*, updated second edition, Bristol.

Courbin, P. 1966: *La céramique géométrique de l'Argolide*, Paris.

Day, P.M. *et al.* 2020: Maritime Commodity Trade from the Near East to the Mycenaean Heartland: Canaanite Jars in Final Palatial Tiryns, *JdI* 135, 1-99 (筆者未見).

Desborough, V. R. d' A. 1952: *Protogeometric Pottery*, Oxford.

————— 1964: *The Last Mycenaeans and their Successors: An Archaeological Survey c.1200-c.1000 B.C.*, Oxford.

————— 1972: *The Greek Dark Ages*, London.

Gercke, P. & U. Naumann 1974: Tiryns-Stadt 1971/1972, *AAA* 7, 15-24.

Hägg, R. 1974: *Die Gräber der Argolis: in submykenischer, protogeometrischer und geometrischer Zeit: 1. Lage und Form der Gräber*, Uppsala.

Kardamaki, E. *et al.* 2016: Transport Stirrup Jars in Late Mycenaean Tiryns: Maritime Transport Containers and Commodity Movement in Political Context, in S. Demesticha & A. B. Knapp eds., *Maritime Transport Containers in the Bronze-Iron Age Aegean and Eastern Mediterranean*, Studies in Mediterranean Archaeology and Literature PB 183, Uppsala, 145-167.

Kilian-Dirlmeier, I. 1984: *Nadeln der frühhelladischen bis archaischen Zeit von der Peloponnes*, Prähistorische Bronzefunde XIII:8, München.

Konstantinidi-Syvridi, E. 2016: Gold Bull's Head Ornaments from the Tyrins Hoard and the Distribution of the Type in the LH IIIC Periphery of the Mycenaean World, in E. Papadopoulou-Chryssikopoulou *et al.*, *Achaïos: Studies Presented to Professor Thanasis I. Papadopoulos*, Oxford, 127-135.

Lemos, I. 2002: *The Protogeometric Aegean: The Archaeology of the Late Eleventh and Tenth Centuries BC*, Oxford.

Maran, J. 2012: Ceremonial Feasting Equipment, Social Space and Interculturality in Post-Palatial Tiryns, in J. Maran & P. W. Stockhammer eds., *Materiality and Social Practice: Transformative Capacities of Intercultural Encounters*, Oxford, 121-136.

————— 2016: Against the Currents of History: The Early 12th c. BCE Resurgence of Tiryns, in J. Driessen ed., *RA-PI-NE-U: Studies on the Mycenaean World offered to Robert Laffineur for his 70th Birthday*, Louvain-la-Neuve, 201-220.

————— 2018: Goliath's Peers: Interconnected Polyethnic Warrior Elites in the Eastern Mediterranean of the 13th and 12th Centuries BCE, in I. Shai *et al.* eds., *Tell it in Gath: Studies in the History and Archaeology of Israel —Essays in Honor of Aren M. Maeir on the Occasion of his Sixtieth Birthday*, Ägypten und Altes Testament 90, Münster, 223-241.

Maran, J. *et al.* 2019: Tiryns, Griechenland: Die Arbeiten der Jahre 2015 bis 2018,

- e-Forschungsberichte des DAI 2019*, Faszikel 1, 68-77. (<https://publications.dainst.org/journals/efb/2182/6595>, 2021年11月24日接続確認)
- Maran, J. & A. Papadimitriou 2007: Forschungen im Stadtgebiet von Tiryns 1999-2002, *AA* 2006/1, 97-169.
- 2017: Gegen den Strom der Geschichte: Die nördliche Unterstadt von Tiryns: ein gescheitertes Urbanisierungsprojekt der mykenischen Nachpalastzeit, *AA* 2016/2, 19-118.
- 2021: Der lange Schatten der Palastzeit. Die nördliche Unterstadt von Tiryns: ein Großbauprojekt palast- und nachpalastzeitlicher Entscheidungsträger, *AA* 2021/1, 67-165.
- Maran, J., A. Papadimitriou *et al.* 2015: Tiryns, Griechenland: Die Arbeiten der Jahre 2012 bis 2014, *e-Forschungsberichte des DAI 2015*, Faszikel 3, 47-55. (<https://publications.dainst.org/journals/efb/article/view/1628>, 2021年12月7日接続確認)
- Maran, J. & P. W. Stockhammer 2020: Emulation in Ceramic of a Bronze Bucket of the Kurd Type from Tiryns, *Origini* XLIV, 93-110 (筆者未見).
- Morris, I. 2000: *Archaeology as Cultural History: Words and Things in Iron Age Greece*, Malden & Oxford.
- Mountjoy, P. A. 1993: *Mycenaean Pottery: An Introduction*, Oxford.
- 1999: *Regional Mycenaean Decorated Pottery*, Rahden.
- Mühlenbruch, T. 2015: Power and Cult in LHIIIC Tiryns, in A.-L. Schallin & I. Tournavitou eds., *Mycenaeans up to Date: The Archaeology of the North-eastern Peloponnese — Current Concepts and New Directions*, Stockholm, 131-141.
- Papadimitriou, A. 1998: Η Οικιστική Εξέλιξη της Τίρυνθας μετά τη Μηκηναϊκή Εποχή. Τα Αρχαιολογικά Ευρήματα και η Ιστορική Ερμηνεία τους, in A. Pariente & G. Touchais eds., *Argos et l'Argolide: Topographie et Urbanisme — Actes de la Table Ronde internationale, Athènes-Argos 28/4-1/5/1990*, Paris, 117-130.
- 2003: Οι Υπομυκηναϊκοί και Πρωτογεωμετρικοί Τάφοι της Τίρυνθας. Ανάλυση και Ερμηνεία, in A. Βλαχόπουλος & Κ. Μπίρταχα eds., *Αργοναύτης: Τιμητικός Τόμος για τον Καθηγητή Χρίστο Γ. Ντούμα: από τους μαθητές του στο Πανεπιστήμιο Αθηνών (1980-2000)*, Αθήνα, 713-728.
- 2006: The Early Iron Age in the Argolid: Some New Aspects, in S. Deger-Jalkotzy & I. S. Lemos eds., *Ancient Greece: From the Mycenaean Palaces to the Age of Homer*, Edinburgh Leventis Studies 3, Edinburgh, chap.28, 531-547.
- Pratt, C.E. 2016: The Rise and Fall of the Transport Jar in the Late Bronze Age Aegean, *AJA* 120, 27-66.
- Sjöberg, B.L. 2004: *Asine and the Argolid in the Late Helladic III Period: A Socio-economic Study*, BAR International Series 1225, Oxford.
- Snodgrass, A.M. 1964: *Early Greek Armour and Weapons: From the End of the Bronze Age to 600 B.C.*, Edinburgh.
- 1971: *The Dark Age of Greece: An Archaeological Survey of the Eleventh to the Eighth Centuries BC*, Edinburgh.

- Stockhammer, P. 2009: The Change of Pottery's Social Meaning at the End of the Bronze Age: New Evidence from Tiryns, in C. Bachhuber & R. G. Roberts eds., *Forces of Transformation: The End of the Bronze Age in the Mediterranean —Proceedings of an International Symposium held at St. John's College, University of Oxford 25-6th March 2006*, Themes from the Ancient Near East BANEA Publication Series 1, Oxford, 164-169.
- 2011: Household Archaeology in LHIIIC Tiryns, in A. Yasur-Landau, J. R. Ebeling & L. B. Mazow eds., *Household Archaeology in Ancient Israel and Beyond*, Culture and History of the Ancient Near East 50, Leiden & Boston, 207-236.
- Styrenius, C.-G. 1967: *Submycenaean Studies*, Lund.
- Takahashi, Y. 2009: *Τα Έθιμα Ταφής στην Αργολίδα: Από τη Μετανακτορική έως και την Πρωτογεωμετρική Περίοδο*, Διδακτορική Διατριβή, Εθνικό και Καποδιστριακό Πανεπιστήμιο Αθηνών.
- Verdelis, N. M. 1963: Neue geometrische Gräber in Tiryns, *AM* 78, 1-62.
- Vetters, M. 2011: A Clay Ball with a Cypro-Minoan Inscription from Tiryns, *AA* 2011/2, 1-49
- 2015: Private and Communal Ritual at Post-Palatial Tiryns, in P. Pakkanen & S. Bocher eds., *Cult Material: From Archaeological Deposits to Interpretation of Early Greek Religion*, Papers and Monographs of the Finnish Institute at Athens XXI, 65-106.

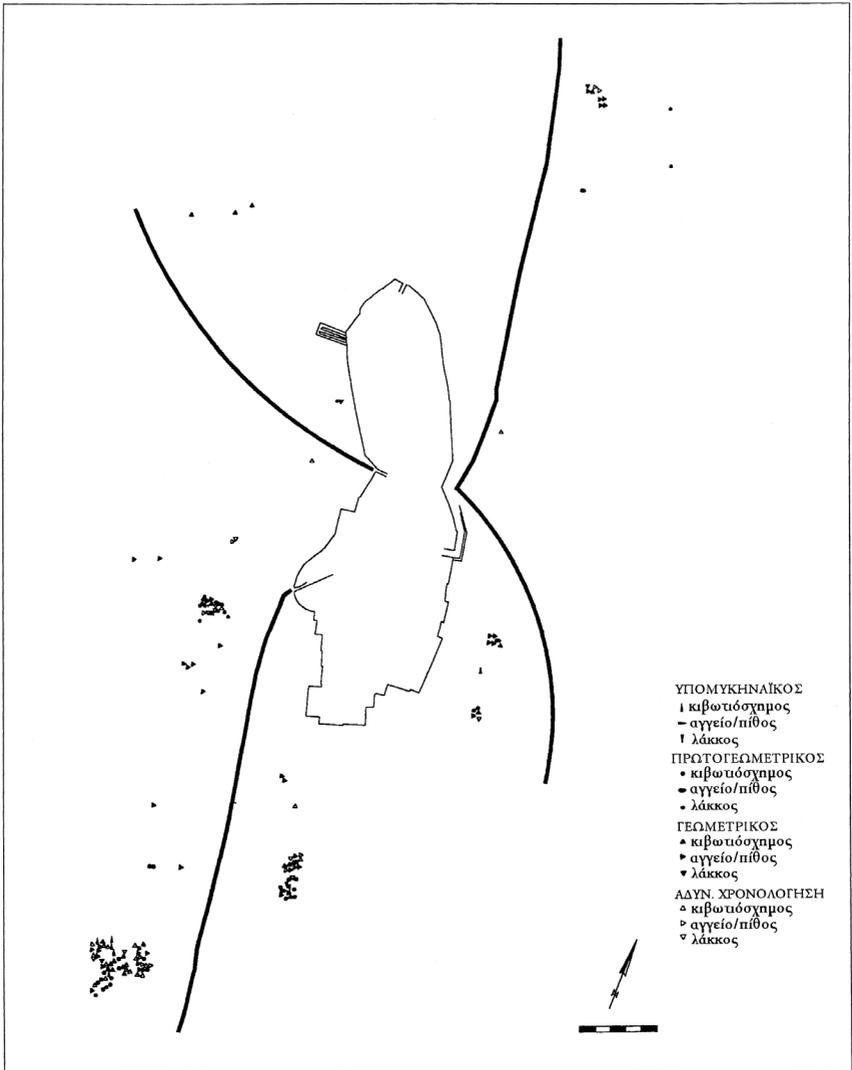


図1 アクロポリス周辺における初期鉄器時代の墓の分布
 (出典：Papadimitriou 2003, 715, fig.1)

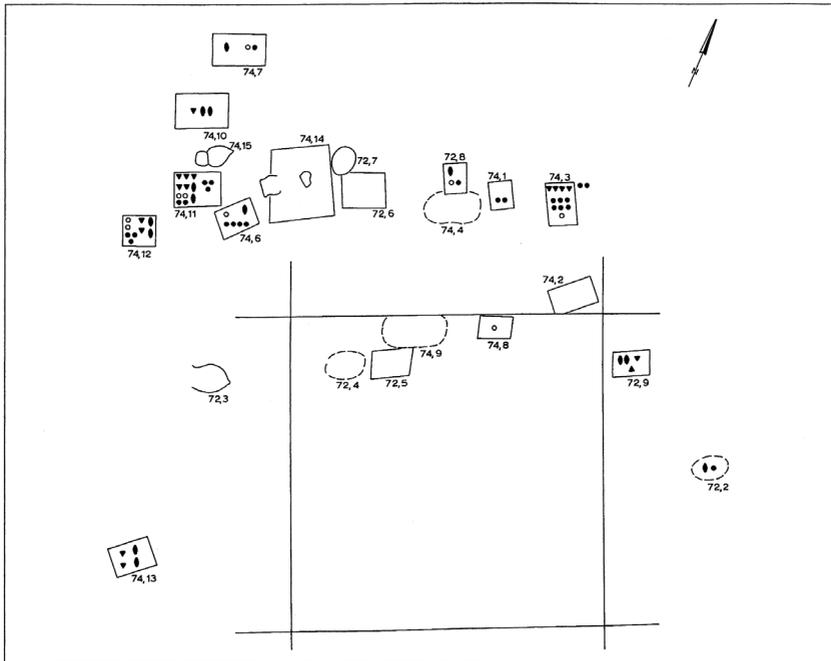


図2 アクロポリス西方の墓域 (出典: Papadimitriou 2003, 723, fig.4)

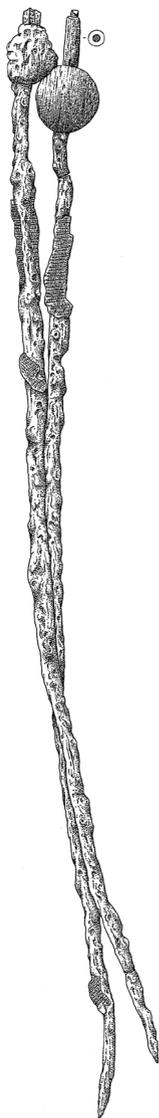


図3 1972/9号墓の鉄製ピン
(左がno.282, 右がno.281、
出典：Kilian-Dirlmeier 1984, Tafel 11)

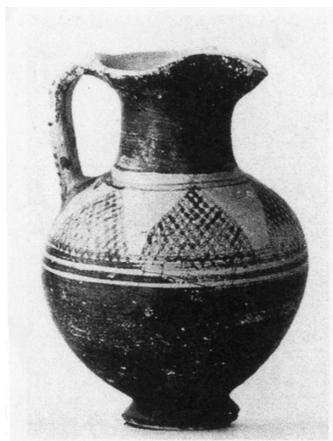


図4 1974/6号墓のオイノコエ
(出典：Lemos 2002, pl.57.7)

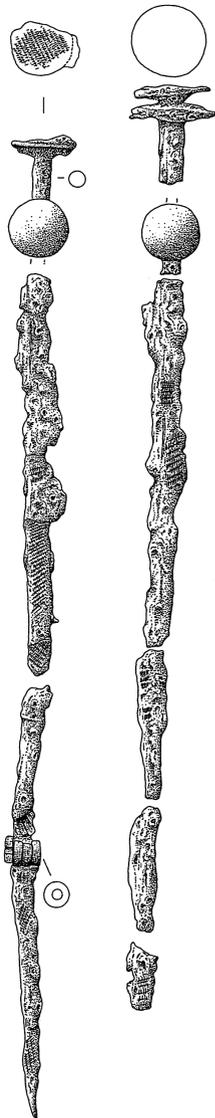


図5 1974/10号墓の鉄製ピン
(右がno.222、左がno.223、
出典：Kilian-Dirlmeier 1984, Tafel 8)

①



②



図6 1974/11号墓出土のスキュフォス
(出典：①Lemos 2002, pl.56.6,
②Lemos 2002, pl.56.7)

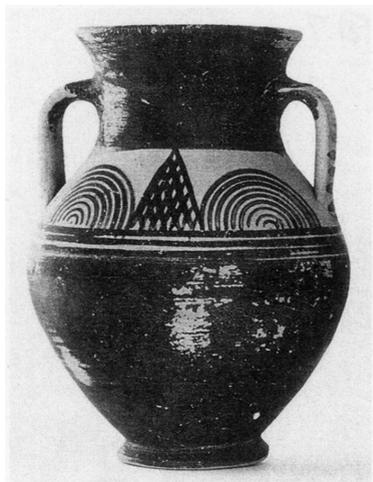


図7 1974/11号墓出土のアンフォラ
(出典：Lemos 2002, pl.56.1)



図8 1974/11号墓出土のアンフォラ
(出典：Lemos 2002, pl.56.2)



図9 1974/11号墓出土のピュクシス
(出典：Lemos 2002, pl.56.3)



図10 1974/11号墓の青銅製ピン
(出典：Kilian-Dirlmeier 1984, Tafel 8, no.210)

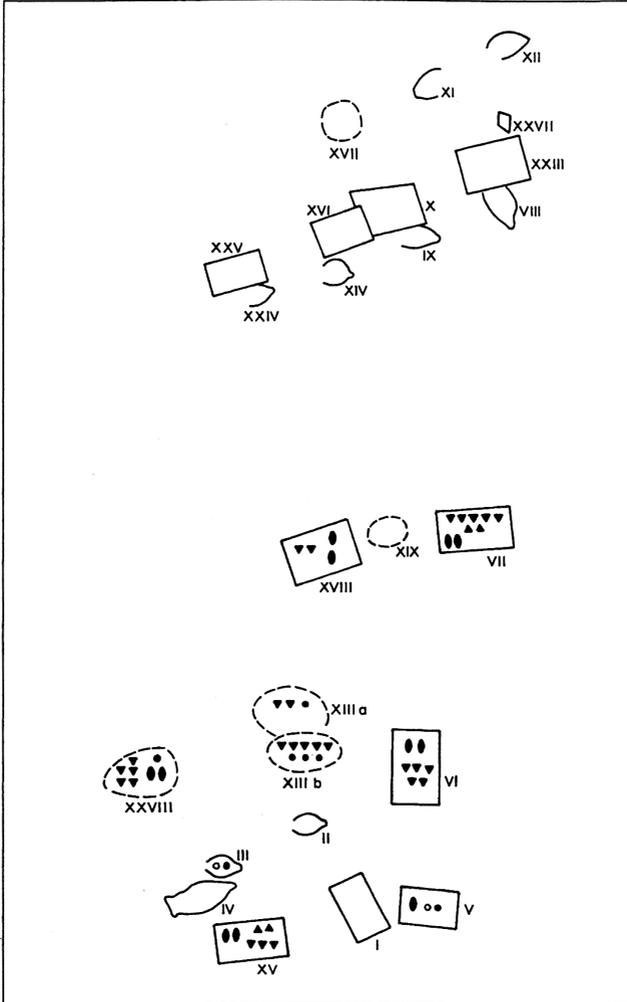


図11 刑務所の墓域 (出典: Papadimitriou 2003, 722, fig.3)

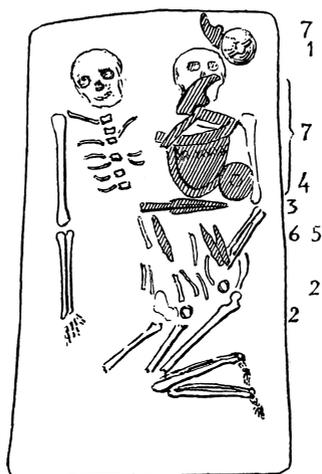


図12 XXVⅢ号墓 (出典：Verdelis 1963, 10, Abb.5)

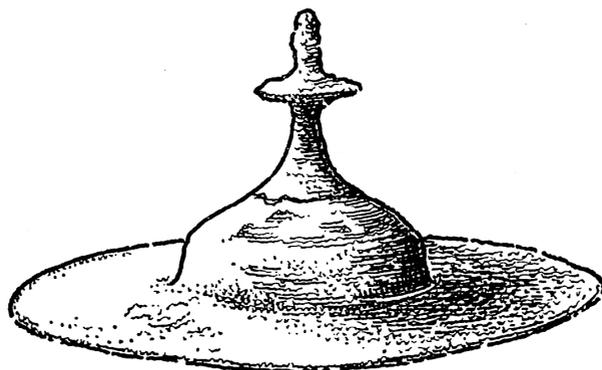


図13 XXVⅢ号墓出土の青銅製円形突起 (出典：Snodgrass 1971, 220, fig.77)

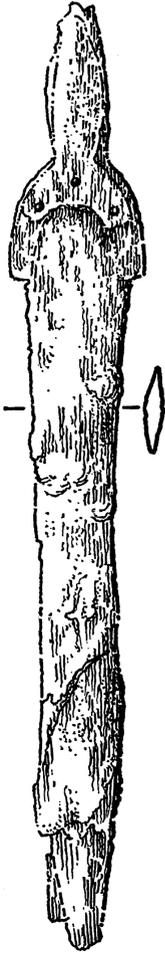


図14 XXVIII号墓出土の
鉄製短剣
(出典：Snodgrass 1971, 220,
fig.76)



図15 XXVIII号墓出土の青銅製兜
(出典：Snodgrass 1971, 318, fig.104)

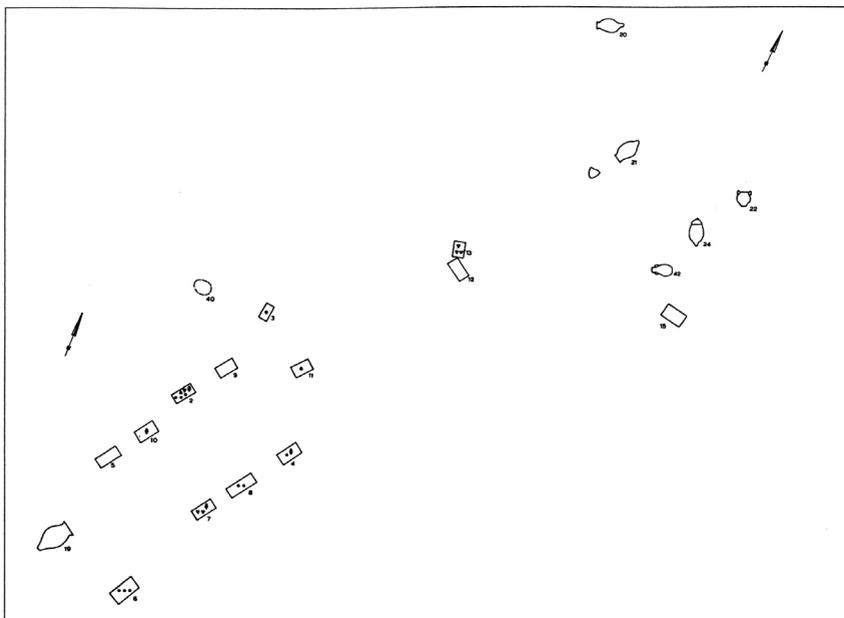


図16 調査区Aの墓域 (出典 : Papadimitriou 2003, 721, fig.2)



図17 17号墓出土のカップ (出典 : Lemos 2002, pl.63.6)



図18 1972/18号墓出土のカップ (出典 : Lemos 2002, pl.19.1)

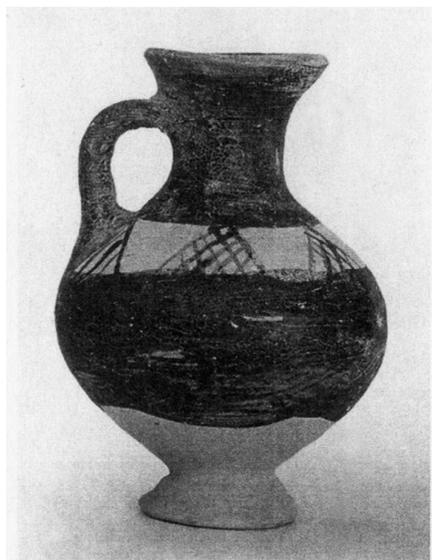


図19 1972/18号墓出土のレキュトス (出典 : Lemos 2002, pl.19.2)